

Title	キリスト教系中学校及び高等学校に在籍する生徒の道徳意識の現状とその背景(生育歴・親との関係・キリスト教学校教育等) : 二〇〇五年に実施したアンケート調査結果を中心に
Author(s)	小池, 茂子
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume24, 2009.3 : 84-101
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3251
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

キリスト教系中学校及び高等学校に在籍する生徒の道徳意識の現状とその背景

(生育歴・親との関係・キリスト教学校教育等)

——二〇〇五年に実施したアンケート調査結果を中心に——

小池 茂子

はじめに

本稿の内容は筆者が客員研究員として参加した二〇〇五年一月から二月にかけて青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部が中心となつて行つたプロテスタントとカトリックのキリスト教系中学校・高等学校生徒三五七四名(中学生一六三四人、高校生一九四〇人)を対象に実施した道徳意識に関する調査研究に基づくものである。調査結果については『キリスト教系中学校・高等学校生徒の道徳意識に関する研究——二〇〇四年度～二〇〇五年度調査研究報告書』(青山学院大学総合研究所二〇〇六年¹⁾)が既刊されている。本稿はその調査結果を基に、筆者が自らの視点を交えて執筆したものであることをここに記しておく。

一・本調査研究における筆者の問題意識の所在

昨今の日本には、一九九八年から十年連続で年間の成人の自殺者が三万人を超えるという現実があり、二〇〇八

年五月一六日に内閣府が発表した成人を対象とした「自殺対策に関する意識調査」では、成人男女の一九・一％が本気で自殺を考えた経験があること、またそのうち二〇・八％は「最近一年以内に自殺したいと思った」と回答したと報道されている。成人の自殺が問題となる中で、子どもの自殺も深刻化し警察庁の統計で、小・中・高校生の自殺者は二〇〇四年に二八四人と報告されている。また、いじめを受けた児童生徒が自らその命を絶つという痛ましい事件が連続して発生したことに伴い、二〇〇六年一月に「文部科学大臣からお願い」が提出されたことは記憶に新しい出来事である。このような問題を生み出す社会構造を変えていく取り組みが必要である一方で、自殺の罪悪性か否かや自明のものといえないとさえ思われる中で、予防医学的な自殺予防策にとどまらない「いのちの尊さ」を考え、言葉で語る根本的価値をめぐる教育活動が、学校教育段階の子どもたちに必要なのではないかと筆者は考えている。そしてそれは自分自身との関係のみではなく、他人やすべての生き物との関係をも含むものではなければならないといえよう。生命をめぐる科学万能主義という新たな信仰とそれに対する懐疑が並存する二一世紀にあつて、人間の生命観はどこに向かつていくのか、また人間のいのちをめぐる課題について取り上げ生命の尊厳について考える教育が学校教育の中でどのような形で可能となるのが筆者の主な関心事である。

今回の「キリスト教系中学校・高等学校生徒の道徳意識に関する研究」調査の主たる目的はキリスト教中学校・高等学校生徒の道徳意識の現状とその背景を明らかにし、現代日本におけるキリスト教道徳教育を構築するための参考とすることを目的として行われたものである。本稿では「いのち」に対する中高校生の道徳意識をはじめ、キリスト教系の中学校高等学校に在籍する中高校生の道徳意識の実態と、生育歴、親との関係、キリスト教学校教育において中高校生の道徳意識の形成に影響を与えると考えられる事柄について言及し、同時に中高校生の道徳意識の実態を、ロバート・ベラー、ローレンス・コールバーグらの理論を援用しつつ考察を試みたのでそれも併せて論

じることとする。

二. 調査対象と調査方法

今回の調査はキリスト教系の中学校三三校、高等学校三八校の協力を得てそこに在学する中学三年生一六三四名と高校二年生一九四〇名を調査対象者としてアンケート調査を実施した。キリスト教系の学校に在学している生徒総数に占める被調査者の割合は、中学生が全体の二・六三%、高校生が一・五六%である。調査校の抽出に関しては、北海道、東北・北陸、関東、中部、関西、四国、九州と地域差に偏りがないように配慮し、当該地域の中で調査に協力願えた学校を調査校として選定した。また、学校ごとに一学年二クラス分(約八〇名)の生徒に教師の立会いのもとアンケート調査を実施し、調査票の返送を依頼した。また、今回の調査は「ある行為」や「ある価値value」或いは「規範(norm)」について中高校生に判断させるように準備した。従って「設問によって問いかけられた、自分の念頭にある行為がなすべきものかどうか」を中高校生に判断させる「事前の良心」を問う設問構成をとった。

三. 調査内容

今回のアンケート調査の内容は大きな区分として、生育歴、生活環境、道徳意識、キリスト教教育の影響から構成されており、それぞれの区分の設問は次の(表1)の内容からなっている。

(表1)

- 一、生育歴
 1. 保育園・幼稚園への通学開始時期、2. 自然に親しむ機会、3. 絵本の読み聞かせ、4. 就寝前のお話、5. 市販のおもちや、6. 家族・親族内の信仰者、7. 尊敬できる先生・大人、8. 憧れの主人公、親友の存在、9. 道徳の時間・宗教(聖書)の時間、10. 芸術系の授業への興味、11. 芸術に親しむ機会、12. 親や家族への反抗期
- 二、生活環境
 1. 勉強時間、2. テレビ・ビデオの視聴時間、3. テレビゲームやコンピュータゲーム、4. 携帯電話の使用、5. 睡眠時間、6. 学習塾、7. 異性の友人関係、8. 理想とする生き方、9. 親からいつも言われていること
- 三、道徳意識
 1. 親に対する意識、2. 他者やいのちに対する意識、3. 不道徳行為に対する意識、4. 行為の判断基準
- 四一、キリスト教教育の影響・学校教育
 1. 信頼できるクリスチャンの先生、2. 学校のキリスト教的雰囲気、3. 学校礼拝(ミサ)、4. 宗教(聖書)の時間への姿勢、5. 現代の倫理的諸問題について学んでいること、6. 現代の倫理的諸問題について学んでみたいこと
- 四二、キリスト教教育の影響・教会とのかかわり
 1. 教会・教会学校への出席、2. 教会・教会学校へ通い始めた時期、3. 教会の行事への参加
- 四三、キリスト教教育の影響・生活の中の聖書、祈り、奉仕活動
 1. 自分で聖書を読む、2. 自分以外の人のために祈る、3. 祈りは聞き届けられる、4. ボランティア活動への参加、5. ボランティア活動・奉仕活動で得たもの

四一四、キリスト教的宗教意識…キリスト教に触れての内的変化

1. 聖書や宗教への関心、
2. 自分の弱さ・醜さ・罪深さの自覚、
3. 人に対する思いやりや優しさの自覚、
4. 社会や他者への貢献意志

四、調査結果

(一) 理想とする生き方

「理想とする生き方」については、「一、お金をもうけること」「二、高い地位につくこと」「三、有名になること」「四、やりがいのある仕事をする事」「五、趣味を楽しむこと」「六、社会に貢献すること」「七、家族と幸せに生きる事」「八、自分の可能性を試す」「九、その他」の中から選択させる形で回答を求めた。結果からは、中高校生共に「家族とともに幸せに生きる事」(中学生三一・一%、高校生三七・四%)、「やりがいのある仕事をする事」(中学生二五・八%、高校生二三%)、という自分の生活や自分らしい仕事を大切にしたいという自己表現的な志向性が強く現れており、「お金をもうけること」(中学生一一・六%、高校生九・六%)、「高い地位につくこと」(中学生二・五%、高校生一・三%)、「有名になること」(中学生三・四%、高校生二・七%)という功利主義的志向や「社会に貢献する」(中学生一・八%、高校生二・五%)という社会貢献への意思は自己表現的な欲求よりも低いことが結果から見取れる。またこれは、一九九九年に日本青少年研究所が行なった『二一世紀の夢に関する調査』⁽²⁾で中学生に尋ねた「人生の目標」の結果、即ち地位・名声への志向、あるいは「社会のために

貢献する」といった社会貢献への意思よりも「その日その日を楽しく暮らす」「平凡だが円満な家庭を築く」「自分の趣味をエンジョイする」という個人的な生活の充実を人生の目標とする者が多いことと一致している。

(二) 親への尊敬・感謝の念

「親を尊敬しているか」との問いには、「両親とも尊敬している」と回答したものは中学生 五七・四%、高校生 六一・〇%、「父親を尊敬している」と回答したものは、中学生 六%、高校生 五・四%、「母親を尊敬している」と回答したものは中学生 一二・一%、高校生 一三・六%であった。また、「親に感謝の気持ちを感じますか」との問いについては中高校生共に、九〇%前後が親への感謝の念を「つよく・まあまあ感じる」と回答している。結果からは親への尊敬の念よりも、感謝の念を抱いている中高校生の割合のほうが高く、また男子生徒よりも女子生徒のほうが感謝の念を抱いているものの割合が多くなっていることが伺える。

(三) 「いのち」をめぐる中高校生の道徳意識

今回の調査では自分及び他者、その他のいのちに対する中高校生の意識を探るべく、『自殺すること』ほどの程度悪いことだと思うか、「生命の危険を冒しても他者のいのちを救おうとする行為を美しいと思うか」「害虫を含め、生き物を殺すことに抵抗があるか」「死後の世界はあると思うか」「困っている人がいたら声をかけるか」等の設問を用意した。

自殺について尋ねた結果は、中学生の七四・六%、高校生の七五・五%と中高生共に全体の七五%が自殺を「とても悪い」あるいは「悪いことだと思う」と回答している。一方で、四人に一人が自殺することについて「あまり

悪いことだと思わない・悪いことだと思わない」との判断を示した。文末に示した図表の(表2)にあるように「自殺をどう考えるか(男女別)」のように中・高校生ともに男子よりも女子の方が自殺を「とても悪い・悪いこと」とみなしている者が多く、 χ^2 検定の結果からも男性と女性の回答傾向に有意差があることが明らかになった。

また、(表3)のように、キリスト教系学校で学ぶ中高生の六五%、即ち三人のうち二人が「死後の世界はあると思う」と回答しており、「死後の世界はあると思う」と回答したものは男子よりも女子に多いことが見て取れる。これは、今回、「自殺」「自己犠牲の愛」「生き物を殺すことへの抵抗」「死後の世界についての有無」といったものに關する設問群の中でも、もっとも大きく男女差が生じた問いであった。

(四) 中高校生の道徳意識とくに「いのち」への認識に影響を及ぼす事項——生育歴・周囲の大人との関係から明らかになったこと——

調査では中高校生の「いのち」に關する道徳意識の形成に影響を与えている項目が何かを考察するべく、「生育歴」や「周囲の大人との関係」を尋ねた質問のクロス集計・及び χ^2 検定を行い、両者の関連性の有無を検証した。

その結果、「親への尊敬」「親への感謝」の気持ちの「ある・なし」が、自殺についての判断をはじめ「いのち」に關する道徳意識に有意な差を生じさせていることが判明した。(表4)「親への尊敬と自殺に対する考え」のように、「両親を尊敬している」中学生の八割強が自殺は「悪い」と回答しているのに対して、「親を尊敬していない」と回答した生徒では「自殺は悪い」と回答したものは六割にとどまり、残りの四割は「自殺は悪くない」との判断を示している。これ以外にも、自殺に対する考えと、生育歴との関連を同様の手法によつて分析したところ、(図1)「自殺に対する考えとの関連項目」のように「親への尊敬・感謝の念」とともに、就学前の「絵本の読み聞かせ」

「就寝前のお話」、学校生活における「芸術系の授業への親しみ」、「尊敬できる教師や大人との出会い」が、これまでの生育歴の中で「あった」と回答しているものが、これらについて「ない」と回答した者よりも自殺を「悪い」と考える傾向が顕著であった。

また、(図2)のように死後の世界の有無について尋ねた設問でも「親への尊敬」、「親への感謝の気持ち」、「絵本の読み聞かせ」が回答に影響を及ぼしていること、さらにこれ以外にも「三世代同居」で生活している生徒がそれ以外の家族形態で生活しているものよりも「死後の世界があると思う」と回答している者が多いことも明らかになった。

今回、中高校生の「いのち」に関する道德意識を探るべく「自殺すること」はどの程度悪いことだと思うか、「生命の危険を冒しても他者のいのちを救おうとする行為を美しいと思うか」「害虫を含め、生き物を殺すことに抵抗があるか」「死後の世界はあると思うか」「困っている人がいたら声をかけるか」の問を設け、分析を加えた結果つきることが明らかになった。第一は、中・高校生ともに男女間でいのちをめぐる道德意識に違いが認められたことである。「自殺」「自己犠牲の愛」「生き物を殺すことへの抵抗」「死後の世界についての有無」の設問全てにおいて、 χ^2 検定結果からも両者の回答傾向に有意差が認められた。第二に、今回の調査からは「親への尊敬・感謝」の気持ち強い生徒のほうが、「自他のいのちを大切に思う傾向がある」との結果が得られた。精神分析学では、個人にとって権威ある大人の命令が個人の中に内在化されスーパーエゴの部分を形成し、権威者がいなくなってもその命令が自足され人間の本能的、無意識的な衝動を批判し判定し、抑制者としての機能を果たすとされている。今回の調査からは中・高校生にとって「尊敬できる」或いは「感謝できる」「親」の存在が、権威ある大人として彼ら彼女らの道德意識に大きな影響を及ぼしていることが裏付けられたといえる。

(五) 中高校生の道徳意識とくに「いのち」への認識に影響を及ぼす事項——キリスト教教育と道徳意識との関連——

今回の調査研究では先の自分及び他者その他のいのちに関連する意識と、それらの意識の形成に影響を与えている要因について学校教育、日常生活におけるキリスト教との関連、教会生活との関連からも分析を行った。そこでは「自殺を悪い」と考えるグループと「悪くない」と考えるグループとの間で、学校教育における生活、日常におけるキリスト教との関わりにおいて違いが認められるか分析を試みた。即ち、中高校生の道徳意識に関する結果を踏まえ、考えの違うグループ間において学校での礼拝への取組みに違いがあるのか、或いは、宗教の時間への姿勢に違いが認められるか等についてクロス集計を行ないその結果を考察した。このことは高い道徳意識が獲得されている生徒でも、キリスト教系の学校におけるキリスト教教育にまったく影響を受けていない生徒がいるのではないかとの問題提起を視野において検証を試みたものである。

(図3)と(図4)に示したように、「自殺を悪い」と考えるグループと「悪くない」と考えるグループとで、学校教育における生活や、日常におけるキリスト教との関わりにおいて違いがあるか²⁾検定を行い分析を試みた。その結果、中・高生共に「自殺を悪い」と考えるグループと「悪くない」と考えるグループ間では「学校にキリスト教的な雰囲気を感じる」、「信頼できるクリスチャンの教師がいること」、「礼拝、宗教の時間が生徒にとって自分を振り返り、悩みに応えてくれる機会となっていること」、「自分以外のもののために祈る」、「祈りは聞き届けられる」と考えている、「教会へ通っている」の項目に有意な差があるということが判明した。

日本の中高校生にとつて、キリスト教と出合いの場は、家庭・学校・教会などが考えられるが、今回の調査から本人が意図するとならないに関わらずキリスト教主義学校への入学が契機となり、そこでの礼拝や教師との出会いそ

して宗教の時間といった学習の機会を通じて感化を与えられ、これがモラル意識の獲得に影響を及ぼすこと。また、学校生活を通じて「学校のキリスト教的雰囲気」を感じ取り、自分がキリスト教の学校に通っていることを意識として自覚し、それが自らの価値や行動に反映させていくこと。さらに「教会へのつながり」、これらの諸要素が中高校生の生命に対するモラル形成に少なからぬ影響を与えていることが読み取れたといえる。

今回の調査では「自殺に関する考え方」と「自分で聖書を読みますか」という設問とのクロス集計を行いこの関連についても検討したが、(図3) (図4) にあるように、中・高校生共に「自殺に関する考え方」と「自分で聖書を読みますか」の間に関連は認められない。因みに、「自分で聖書を読みますか」という問に対する回答は、中学生の場合「だいたい毎日・比較的よく読む」(六・〇%)、「全く読まない」(六五・一%)、高校生では「だいたい毎日・比較的よく読む」(五・一%)、「全く読まない」(六九・七%)であった。日本のキリスト教主義学校では、聖書を生徒たちが「日常において自分から読み」生活にその教えを反映させるというよりも、礼拝、宗教の時間や授業を通じて、キリスト教の価値観に触れそれが生徒の問題意識に応える機会となつていくことが伺える。その意味でも、キリスト教主義学校における、礼拝やキリスト教関連の授業が重要な意味を持つといえる。しかし、同時に、キリスト教主義の学校における教育が、そこで学ぶ生徒たちに対して「聖書」を生徒たちが自ら紐解く行為に結びつけられないとすれば、彼らが学校を卒業し、礼拝の時間や宗教の時間との接点を持たなくなつたときに、彼らは人間が生きる上で自らの「いのち」や社会の中における他者の「いのち」をめぐる判断のよりどころを何に求めていくのだろうか。「自殺を悪いことだと思うか・思わないか」という判断に、「自分で聖書を読むこと」が結びついていないことは、翻つて自他のいのちを大切にするという規範の抛り所が聖書を読むこととのつながりでは獲得されていない状況にあることを意味する。このことを日本のキリスト教主義学校の教育でどのように捉えて行くのか、

今後のキリスト教系の学校教育の課題の一端が明らかになったといえる。

(六) 困っている人に声をかけるか

今回の調査では、中高校生の事前道徳といった場面を念頭において如何に考えるかは別に、他人が困っていたら実際に行動に結び付けて助けることができるのかという問を設け分析を行った。(表5)のように「困っている人がいたら声をかけますか。」との問に対して、声をかけることが「よくある」「まあまあある」と回答したものは中学生全体の三七・〇%、高校生では八七・六%となっている。この結果をみると、困っている人がいてもなかなか声をかける行為に結び付けられない日本の中学生の姿が浮かび上がるが、同様の設問を韓国のキリスト教系(プロテスタント)の学校に在学する中学三年生にアンケート調査³を行なった結果、全体の七八・五%が声をかけることが「よくある」「まあまあある」と回答している。両者の違いをどのように解釈するべきか。儒教の伝統を文化の中に色濃くもつ韓国のキリスト教学校に学ぶ中学生と日本のそれとの違いなのか、今後さらなる検証が求められるものといえる。

(七) 道徳的判断の拠り所

今回、キリスト教主義の学校に学ぶ生徒たちが道徳的な判断およびそれに基づく行為を行なうときに何を拠り所として価値の判断を行なっているのかこれについて検証するために、ローレンス・コールバーグの道徳性の発達段階⁴に関する学説に基づき問いを設定した。コールバーグは、ピアジェの認知発達理論をベースに、地からある大人からの罰を恐れて、盲目的に服従する道徳性発達の第一段階から、自分や他人の欲求を満たすための手段を正し

い行為と考ふる道具主義的な第二段階、他者からの肯定を求めて他者に同調する第三段階、權威や規則にしがたい秩序維持を志向する第四段階、私的な個人の権利も勘案しつつ社会的基準や法律に合理的にかなう行為を目指す第五段階、そして普遍的な倫理原理に従が良心に基づき行動する第六段階へと道德性の発達段階を定式化している。

今回の調査ではこれらの発達段階を簡略化し、道德的行為の抛り所を「親や教師」「規則や法律」「自分の良心」さらに「目に見えないものへの畏怖の念」というように設定し、生徒たちが道德的判断を下す際、これらの要素がどれだけ重要度を持つかそれぞれの要素について「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえはあてはまらない」「まったくあてはまらない」の選択肢を設け回答を求めた。「親や教師」「規則や法律」「自分の良心」という規範について三重クロスを行なったものが(表6)である。これを見ると、「良心」のみに照らして判断するのであつて「親や教師」「規則」が道德的判断の基準ではないと回答したものが全体の三一・六%、中高校生全体の約三分の一で一番多い。次いで「親や教師の見方を最優先させる」「規則や法律に従う」「良心に照らして判断する」という判断の根拠が三要素とも同時に「あてはまる」と回答した生徒で全体の約二三%を占め、次いで「親や先生の目を最優先させる」「良心に照らして判断する」の両方があてはまると回答した者が二十%となっている。

今回の結果では、自分の良心のみに照らして判断するものが一番多かったものの、自分の良心と親や先生、規則や法律といった規範が三つどもえになっている者や、親や先生といった權威者と自らの良心が同時にせめぎ合う状況を示したものも少なからず存在し、コールバーグの道德意識の段階説を日本の中高校生に安直に当てはめられないことが明らかになったといえる。

(八) 中高生の生命への関心——現代社会の倫理的問題について学校で「学んだことがあるもの」「学びたいこと」からみえてくるもの——

問 学校でつぎのことからについて学んでみたいと思いますか。あてはまるものをすべて選んでください。

1. 自殺
2. 安楽死
3. 死刑・死刑制度
4. 脳死・臓器移植
5. クローン
6. 人工授精・体外受精
7. 人工妊娠中絶
8. エイズ
9. 心身の健康
10. 性差別
11. 同和問題
12. 外国人差別問題
13. 人種差別
14. 障害者問題
15. 同性愛
16. 人身売買
17. テロ・戦争・軍備・平和
18. 食料・飢餓問題
19. ホームレス
20. ストリートチルドレン
21. ごみ問題
22. 地球環境問題
23. 情報化社会のモラル
24. 高齢者問題
25. 諸宗教の教え
26. カルト問題
27. その他(具体的に…)

上記のように今回の調査では、現代社会の問題を二六項目に渡り提示し、中高校生にこれらの中から学んだことがあること、学んでみたいことをそれぞれ自由にいくつでも選んでもらう形で回答を求めた。まず中学生が現代社会の問題として中学生が学校で習ったことがあるテーマの上位に挙げられたものは、「地球の環境問題」や「テロ・戦争・軍備・平和」「人種差別」「ごみ問題」などの問題であるが、実際の生徒たちの関心の上位を占めたものは「クローン」、「ストリートチルドレン」「安楽死」「自殺」などの生命倫理に関する問題や自分たちと同じ世界の子どもを取り巻く問題や、いのちをめぐる社会問題である。高校生についても、彼らが学校で学んでみたいテーマの上位は、「クローン」「ストリートチルドレン」「死刑・死刑制度」「自殺」「テロ・戦争・軍備・平和」などである。高校の女子生徒においては中学生の男女、及び高校生の男子には上位に上げられていない「同性愛」が第二位に位置している。今回の調査では特に、中学生では学校で習ったことがある内容と彼らの抱く関心事に大きなずれがあ

ることが判明した。「クローン」「安楽死」「自殺」「死刑・死刑制度」等、現代社会をとりまく人間の生命をめぐる問題に関する彼らの学習関心を、教育の現場がどのように受け止めていけばよいのか、さらにそれらを彼らの生活場面での規範意識や実際の行いにつなげていくことができるのかという新たな課題が調査結果から明らかになったといえる。

五. 最後に——いのちをめぐる教育の可能性——

一九九六年の中央教育審議会答申では新しい教育価値として「生きる力」を据え、その中で「これからの社会は、変化の激しい行き先不安な厳しい時代と考えられます。そのような社会では、子どもたちに生きる力をはぐくむことが必要です。生きる力とは自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や、体力、……」と謳っている。

二〇〇八年一〇月、聖学院大学創立一九周年記念講演会「生命といのちを支えるケア」の中で柏木哲夫は「生命」と「いのち」を区別し、また「生きる力」と「生きていく力」は異なると指摘している。そこで同氏は「生命」と「いのち」を区分し、「生命」は有限で閉鎖性（終わり）のある客観的な生命活動を指し、その一方で「いのち」は永遠性、開放性、主観性をもつものであると定義した。さらに、「生きる力」とは、生命体として生命活動を維持していく力であるが、「生きていく力」とは自らの存在の意味に根差し、生き抜いていく根源的な力を指すと論じている。このような意味からも、キリスト教主義学校における「いのちの教育」は、単に「元気に活動的にたくましく」「生き

る力」を育てるといった生命や道徳意識の肯定的教育価値を取り上げるだけでなく、あえて生や人間にまつわる否定的要素（死・病気・喪失体験や悲嘆、いじめなど）をも教育内容として取り上げ、両者を止揚することを通じて、自らの存在の意味を探求し、それを通じて自分にとっての生を生き抜く力を各人が獲得することを目指して行われるべきであるといえよう。また、それを通じて各人が自己のいのち、他者のいのち、あらゆる生命に対するいのちの尊厳やそれを大切にする根源的な意味を知ると同時に目指さなければならぬ。これらの現代社会に存在する「いのち」をめぐる現代的課題に対してキリスト教主義の学校教育はどのように応えていくことができるだろうか。今回の調査結果からは、自他のいのちについて高い道徳意識を持つていたりことや死後の世界を受容すること、学校礼拝（ミサ）や宗教の時間に熱心に取り組んでいることや、自分で聖書を読む、祈りは聞き届けられる、教会に通っているとの間に関連があることが判明した。しかし、このような礼拝や宗教の時間への積極的な取り組みをしている、教会に通っている、聖書を紐解き、よく祈るとの回答をした生徒はキリスト教系の学校に在籍する生徒全体からみれば少数である。しかし、このような生徒の多寡よりも、むしろ学校礼拝（ミサ）、宗教の時間を通じて確実に生徒の中に自らの根源を支えるいのちの意味を考え、「いのち」に対する高い道徳意識を獲得するものが確実に育っていることに確信を深め、聖書の示す教えに根差した「いのちの教育」を行うことの重要性が改めてここに示されたと考えるべきだろう。また、「いのちの教育」の展開の可能性は宗教の時間は言うに及ばず、二〇〇二年度から学校教育に導入された「総合的な学習」の中で開かれうると筆者は考えている。「総合的な学習」は、従来の教科の枠を超えた新しい概念で、新学習指導要領では「各学校は、地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的、総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行う」と定義されており、総合的な学習のテーマとしては、生命（いのち）、生と死に関するテーマも多面的広がりを持つテーマとして認知されつつ

ある。

今回の調査では、中高校生の中に、自分の良心だけではなく、「親や教師」中でも親という権威者が道徳的判断基準の拠り所として大きな影響を持っている状況が認められた。しかし同時に中高校生はこれらの文化的基礎を持ちながら、キリスト教学校での学びを通じて新たな価値と遭遇し自分の道徳意識を獲得していく状況が結果から浮き彫りになったといえる。人間の生命と死をめぐる世代と世代の関わりの問題、人間の生命と自然、人間の生命と地球環境や他の生き物との関係といった地球全体の生死に結び付けた課題などを、キリスト教主義ならではの視点から積極的に取り上げていくことが、中高校生の問題意識に応えていくことにもつながるものといえよう。その意味で、他の学校がなしえない実験的な教育に取り組んでいくこと、またそれを社会に向かって発信していくことがキリスト教主義の学校に求められている。

注

- (1) 『キリスト教系中学校・高等学校生徒の道徳意識に関する研究—二〇〇四年度～二〇〇五年度調査研究報告書二〇〇四年度～二〇〇五年度調査研究報告書』青山学院大学総合研究所キリスト教研究部二〇〇六年
- (2) 財団法人日本青少年研究所『二一世紀の夢に関する調査報告書』一九九九年
- (3) 二〇〇五年一月～二月、韓国基督教学校聯盟加盟の中学校・高等学校に在籍する中学三年生(九九六名)、高校二年生(九七八名)を対象として、日本で実施した「道徳意識に関する調査」を実施した。データは『キリスト教系中学校・高等学校生徒の道徳意識に関する研究二〇〇四年度～二〇〇五年度調査研究報告書《別冊》日本と韓国の比較調査研究』より引用した。

(4) 片瀬一男『道徳性の発達段階——コールバーグ理論をめぐる論争への回答』新曜社一九九二年

(二〇〇八年五月二十一日、「キリスト教と諸学」の会における講演に基づく)

(表2) 自殺をどう考えるか(男女別)

		とても悪い・ 悪いことだと 思う	あまり・ 悪いことだと 思わない	合計
中学生	男	339 (65.4%)	179 (34.6%)	518 (100.0%)
	女	812 (77.7%)	233 (22.3%)	1045 (100.0%)
高校生	男	524 (69.5%)	230 (30.5%)	754 (100.0%)
	女	932 (79.5%)	240 (20.5%)	1172 (100.0%)

カイ2乗検定 中学生p.<0.01 高校生p.<0.01

(表3) 死後の世界はあると思う(男<女)

		そう思う・ どちらかといえばそ う思う	そう思わない・ どちらかといえばそ う思わない	合計
中学生	男	319 (56.2%)	249 (43.8%)	568 (100.0%)
	女	742 (71.1%)	302 (28.9%)	1044 (100.0%)
高校生	男	413 (54.9%)	339 (45.1%)	752 (100.0%)
	女	843 (72.2%)	324 (27.8%)	1167 (100.0%)

カイ2乗検定 中学生p.<0.01 高校生p.<0.01

(表4) 親への尊敬と自殺に対する考え

		自殺は 悪い	自殺は 悪くない	合計
中学生	両親共に尊敬	761 (81.7%)	171 (18.3%)	932 (100.0%)
	親を尊敬して いない	229 (59.6%)	155 (40.4%)	384 (100.0%)
高校生	両親共に尊敬	966 (82.1%)	211 (17.9%)	1177 (100.0%)
	親を尊敬して いない	205 (55.0%)	168 (45.0%)	373 (100.0%)

カイ2乗検定 中学生p.<0.01 高校生p.<0.01

(表5) 困っている人に声を掛けるか

		「よくある」 「まあまあある」	「あまり」 「ほとんどない」	合計
中学生	日本	604 (37.0%)	1025 (63.0%)	1629 (100.0%)
	韓国	781 (78.5%)	214 (21.5%)	995 (100.0%)
高校生	日本	816 (87.6%)	116 (12.4%)	932 (100.0%)
	韓国	790 (80.9%)	187 (19.1%)	977 (100.0%)

(表6) 道徳的行為の判断基準(中高生)

親や先生の見 方を最優先	規則や 法律に従う	良心に照ら して判断	合計
○	○	○	806 (22.7%)
x	○	○	351 (9.9%)
○	x	○	700 (19.7%)
x	x	○	1123 (31.6%)
○	○	x	82 (2.3%)
x	○	x	52 (1.5%)
○	x	x	167 (4.7%)
x	x	x	275 (7.7%)
			3556 (100.0%)

